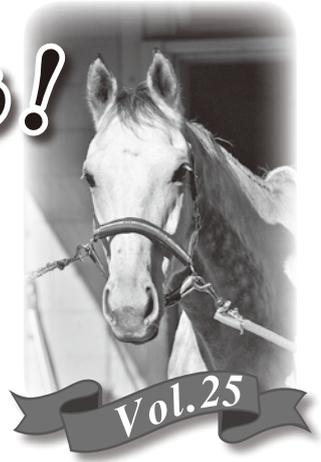


ドレッサージュホースに育てよう!



㊦ “しくじり” 競技会参加レポート2 ～リベンジ編～ ㊦

今年に入ってからオースミイレブンとセントジョージに挑戦していますが、3回目の競技会に参戦してきました。前回の失敗を取り戻すために、約1か月間かけて再調整を行いました。主な修正点は、速歩のペースの弾発を生み出すことです。前回の失敗から毎日、ただひたすら速歩の弾発に集中してきました。前回は、練習馬場で弾発を作り出したものの、本番で反抗されたため結局は全てを諦めて、単調な速歩でただ経路をなぞるだけで終わってしまいました。同じ轍は踏まないためにも、この1か月は重要な修正期間でした。以下が修正のポイントです。

- ・収縮速歩を行うために推進を強める（半減却の確立）
- ・頭頸を低く保つために、騎手の屈曲扶助→馬の屈曲→騎手の拳の譲り→馬の譲り、という手順で収縮しながらもリラックスを求めてハミ受けの安定を図る（透過性の確立）

特に推進を増し収縮を求めると頭頸を上げようとするオースミイレブンには、今でも苦心しています。ここで効率的に《折り返し手綱》を使用することもオプションとして考えられますが、この補助具が強く作用し過ぎるため解決したと誤解してしまうこと、使用後の反動が大きいこと、私自身が正しく使用できないなどの理由で、装着は見合わせました。もちろん、この補助具を使用するための知識と経験を持ち合わせていれば、非常に有効な道具と考えられます。そもそもこの補助具は、馬の顎を譲らせるものではなく、顎の抵抗などが出てきた時にだけ作用するように使うものです。騎手が折り返し手綱を短くしていき、馬に対して能動的に作用させるものではありません。また必要な期間のみの使用に留め、恒常的な使用になってはいけません。これらを理解していなければ、非常に危険な補助具になり得るので、安易に使用すべきではありません。

基本的に私は、《折り返し手綱》を調教で装着しない選択をしています。その場合、騎手は常に馬に指示を出さなければならないし、馬の反応を確かめながら、推進とそれを受ける手綱操作の加減を考えていなければなりません。馬とのコンタクトが静定されるまでは、非常に大変な作業ですし、馬の反応を逐一感じて、その度に馬の気持ちを尊重しながら良い方向へ導かなければなりません。しかし、これらが我々には必要で、補助具を使用しないことは、我々の大切な馬術感覚を磨く良い機会になると考えています。きっと周囲からは、「そんなの折り返し手綱を使えば一発で解決するのに、意地張って使わないなんてナンセンスだよな、アイツは……」と思われるでしょう。確かに意地もあります。常にストレートに馬の口と反応を感じたい、ただそれだけです。類似した道具も一切使いませんし、ハミにも大きな拘りはありません。基本的に使用するのは、水勒と大勒のみです。これまで、オースミイレブン以上に問題があった馬についても、この方針でやってきました。今後もしっと変わらずにいると思います。

話が脱線しましたが、1か月かけて、「推進（脚）→シートと拳でそれを受けて弾発を生み出す」という方法で改善した速歩を、競技会で実践することができました。以下がセントジョージ賞典の結果です。

1日目 60.526% 2日目 61.622%

1日目の速歩区間は、馬を積極的に動かして良い感覚だったのですが、動かし過ぎることによって、この馬がもともと持っている、左右の肩の出方の差が大きくなるという問題が出てしまいました。積極的な動きとスイングを評価するジャッジと、アンイーブンをとるジャッジに差が出ました。

2日目はその反省を活かし、弾発を強めてアンイーブンを抑えることに成功しました。その違いをいずれのジャッジからも評価していただき、それが得点率に反映されました。しかし、まだ完成した訳ではありません。この馬の欠点を隠し、長所を活かすことに終わりはありません。

㊦ ピアッフェ・パッサージュ Part1 ㊦

これらの運動を実施するには、グランプリレベルの馬でなければならない、ということはありません。どんなグランプリホースも、最初からこの運動ができるわけではありませんから、必ず始まりがあります。私は、たいいていの馬に対して、調教のかなり初期にこの運動を試みます。それは、速歩運動で収縮させてクオリティを求める際に、馬がパッサージュのように反応することがあるからです。収縮→弾発を求める際に、前への行き場を制御された馬が、フワッと浮き上がる反応をすることがあります。それがピアッフェやパッサージュになっていきます。

馬場馬としての血統を持つ馬は、比較的容易にこれらの動きができますが、速く走ることを目的とするサラブレッドにとっては、非常に難しい運動です。しかし、正しい体勢と収縮を求めると、パッサージュのような歩様を見せるサラブレッドもいます。中にはリズムの良いピアッフェをすぐに覚えるサラもいます。放牧中などに興奮して尾を上げて高揚した時に、パッサージュ歩様になる場合もあるので、それを騎手の扶助によってできるようにすることが目標です。

オースミイレブンに関して言えば、騎乗中に物見をしたりホットになったりした場合に、パッサージュのような動きをすることを、かなり初期の段階で感じていました。しかしそれらは、速歩中に浮遊期のような反応があっただけで、右前だけ上がり左前はほとんど上らず、右後肢は踏み込むが、左後肢は引きずるように全く踏み込まない、というアンバランスなものでした。これは、ほんの僅かな光に過ぎなかったのですが、これらのちょっとした反応がなければグランプリ馬にはなれないため、その光を大きなものにしていく希望を持ちました。

◆ ハーフステップ

この運動は、文字通り通常の1歩の歩幅を半分にする事です。ピアッフェを速歩の最終収縮として考えていますので、まずはこの運動を取り入れていきます。

「ピアッフェとパッサージュのどちらを先に調教するのか？」という問題がしばしば議論されますが、どちらでもよい、馬次第というのが正解だと思います。私の場合は、最初にハーフステップの運動をして、馬の反応を見ます。ハーフステップを始めて、もしもピアッフェのようにその場でステップを踏めるだけの反応を示せば、ピアッフェを先に教えようと思います。そうではなく、前へ出て行きながら速歩が浮いてくるようであれば、パッサージュを先に教えるようにしています。先にピアッフェを上手に覚えて、その後にパッサージュを習得してくれることが理想ですが、無理やりピアッフェをさせようとすると、馬が苦しいということ覚えてしまい、その後、ピアッフェをしようとするとパニックになったり立ち上がったりと、興奮状態に入ってしまうケースがあります。そのような馬は、パッサージュを詰めていき、徐々にピアッフェへとつなげるようにしています。

まずは、ハーフステップの手順を考えていきましょう。



- ① 収縮常歩をする
- ② 脚扶助により前進氣勢を増して
- ③ 同時に手綱操作で馬を丸め
- ④ 収縮常歩の1歩の歩幅を縮める
- ⑤ そこから速歩を発進しようとする
- ⑥ 速歩発進の扶助を出すものの、そこに留まろうとする（半減却）
- ⑦ 馬が止まろうとすれば推進、前に行こうとすれば減却
- ⑧ 騎手は真っすぐ座り、後傾したり特別に騎座を強くさせたりしなくてもよい
- ⑨ 馬の後軀は沈下するようなイメージ（後ろが低く、前が上がる）

・脚扶助：後肢からの推進が足りなくなった時のみ使用

・手綱扶助：コンタクトを持ってハミ受けを維持し、馬を丸める

可能な限り軽いコンタクトになるように、拳の譲りと維持を交互に使う

これら一連の手順で、馬が収縮度を増してその場でステップを踏むようであれば、その反応はベイビーピアッフェからピアッフェへと発展していきます。もし、馬が我慢できずに前に飛び出してしまうのであれば、せめてゆっくりと浮遊した速歩をさせるようにします。それは、ベイビーパッサージュからパッサージュへと発展していきます。

これらの運動は、非常に要求度が高いため細切れに行わなければなりません。少しでも馬が我慢してステップを踏んだら、直ちに愛撫をして褒めて、全ての扶助から解放してあげます。そして、また繰り返します。このトレーニングを運動全体の最後に少しだけ行い、時間を費やし過ぎないようにします。馬が、「苦しいことを要求されている」という認識にならないようにすべきで、「ちょっとだけ、いつでも遊ぶ感じで」という意識をお互いに持つようにします。

今回は、オースミイレブンが抱える問題点と改善に向けた方策、パッサージュに関して考えてみたいと思います。